

欲望の代金は5万円と冷めたピザ

※ この小説には、BL・やおい・耽美

と呼ばれる表現、性描写が含まれています

北垣は社会的に見れば、道を外れた男だった。

両親の離婚から不良たちの仲間入りを果たし、その筋からの誘いに乗って今や華鳳会という暴力団員だった。人相が悪い上にスキンヘッドで益々迫力がある。背中の彫り物は天女と蛇。

喧嘩も強く、頭もよかったので、幹部達には大層かわいがられた。おかげで彼はそれなりの地位にいる。しかし、地位があがれば上がるほど、彼の悩みは大きくなっていった。

「つまりケツを貸す相手がいなくて困ると」

「そうハッキリ言われちゃ、みも蓋もありませんが」

北垣はサウナでハッと笑った。隣に座った兄貴分である南田には自分の性癖はばれていた。ある日自慰をしているところを見られたのだ。ケツの穴に指を突っ込んでいるところを。

「それにしても分かんねえもんだな、お前みたいな男が野郎が好きなんて。女はいいぞ、優しくて強い」「ハハ、そりゃ俺だって女の魅力ぐらい分かっていますよ。ただ、やっぱり違うんすよ。あの気持ちよさを

知っちゃったたら、ああ、俺はこっち側の人間なんだって気づかされてましたね」

北垣があっけらかんとそう言っているのを見ながら、南田はふうとため息をついた。

「舎弟の誰かにイイ奴いねえのか」

「ダメですよ、兄貴。俺は組の中でそういうヤツは作らないって決めてるんです。いつタマとられるか分からないような世界で、ケツまで預けちゃあいけません」

南田はふつと笑った。「冗談か？」

「まあ、半分半分つてトコですか」

北垣も笑顔を返して立ち上がる。「すみません、先失礼します」

南田に挨拶をして、北垣はサウナ室を出た。顔に当たる空気が気持ちいい。水風呂で水を汲んで、軽く身体に掛ける。

北垣は一度だけ舎弟と関係を持ったことがある。内部抗争が起こった時に、一度それをネタに脅しを掛けてきていた。自分を抱いたことで優位に立て

ると勘違いした行動だった。北垣は情けも情もかけることはなかった。結局男は今、指を二本なくして、刑務所にいる。

少し昔のことを思い出して、北垣は苦笑しながら浴場をあとにした。

北垣はレンガ作りのマンションに住んでいた。セキュリティはしっかりしていて、ロビーの入口では暗証番号が必要だ。入居に対して北垣は身分は伏せたのだが、一見して分かるその顔つきと態度でかなり手間取った。しかし彼なりの誠意と態度で管理人はついに折れる。最上階の角部屋で、売れ残っている部屋ならOKということで北垣は迷うことなく購入した。もちろん現金一括だ。オーナーと管理人は、支払いの時、目の前に積みあがった札束に目を白黒とさせていた。

北垣は群れるのを嫌った。ほとんどが組事務所で過ごすのだが、休日ともなればきちんと家に帰り一人の時間を過ごした。世話を焼きたがる舎弟た

ちを追い払い、自宅にこもる。何をすることもない、取っている新聞三紙に目を通し、ネットで情報を仕入れる。ワイドショーと視聴率のいいバラエティ番組を見る。彼の長年している習慣で、休日の過ごし方はいつもこうだった。

私服らしい私服はない。ネクタイを外して、いつも着ているワイシャツのボタンを二つあける程度。掃除と洗濯はわりと好きで、いつも部屋は片付いているが、苦手なのは料理だった。ほとんど家にいないので、冷蔵庫もビールやミネラルウォーターくらいしか入っていない。

この日も北垣は出前を頼んだ。たまたま新聞広告で見たピザ屋に電話する。オススメを適当に頼んで電話を切ると、三十分後にはロビーのチャイムが鳴った。

テレビカメラ付きのロビーの応答電話を取ると、画面にピザ屋のユニホームを着た青年が映った。北垣は無言で入口の開閉のボタンを押す。ピザの店員はロビーの扉が開いたのを確認すると、そちらへ

と足を向けた。五分とたたず玄関のチャイムが鳴り、北垣はドアを開けた。

ピザを片手に持っていた青年は、保温材のケースから箱を二つ出すと、下駄箱の上に置く。

「三千百五十円です」

愛想のない声。帽子の下で俯き気味。身長は百七十を越えているくらいで、北垣とは頭一つ分低い。緑色の色あせた制服のボタンが多めに開けられていて、形のいい鎖骨が見える。顔が小さく、先程開閉していた唇は乾燥して皮が剥けていた。帽子の下からはみ出している髪は、今時の若者には珍しく真っ黒で、光の加減か青光りしているようにも見える。

北垣は、尻にさしていた財布を取ると、千円札を四枚、青年に差し出した。無言でそれを受け取るうと彼が手を出した時に、北垣はその手を払った。

青年は少し顔を上げて、北垣を見た。睫毛が長く、少しつり上がった目とぶつかった。

「おまえ、生意気なツラしてるな」

北垣はそう言つて、青年の顎を掴んで上を向かせた。きめ細かい肌の上に切れ長のつり上がった瞳がある。唇は少し歪んで、それは挑発しているようにも笑っているようにも見えた。

北垣は少し下半身が熱くなつた。

「三万やろう」と北垣は提案してみた。「おまえのをしゃぶらせてくれないか？」

青年は少し眉毛を動かして不審そうな顔をした。「なにをですか？」と北垣に尋ねる声は低く落ち着いている。

北垣は掴んでいた顎から手を離し、青年の乾いた唇を人差し指で撫で、「ここと、ここさ」と股間を握つた。

青年の北垣を見る目が明らかに蔑んだ色を見せた。「アンタ、変態？」

北垣はその言葉が出るか出ないかのタイミングで青年の頬を平手打ちした。その勢いに青年は少しよろける。赤くなつた頬を北垣に向けたまま、血の混じつた唾を玄関に吐き出す。

「今配達中ですので、店長に怒られるんですが」

青年は北垣を見据えてそう言った。萎縮したわけでも怒ったわけでもなく、青年は冷静だったが、挑発しているような態度は相変わらずだった。

「いらん心配はするな」

北垣はそれだけ言った。彼にとって青年がクビになろうが関係なかった。

青年は北垣に分かるか分からないかぐらいの小さな反応をした。吐息に似たため息について、少し視線が動く。それを北垣は了承と捉えて「入れ」と青年に告げた。

青年は無言のままスニーカーを脱ぐと、式台上がり、リビングへ進んだ。北垣はドアにチェーンとロックを掛けてから青年の後に続いた。

青年はフローリングの上で突っ立ったまま、視線だけで室内の様子を観察していた。そして北垣が真正面に立つと、帽子を脱いで視線を合わせる。

北垣は舐めるように頭の前からつま先まで青年を眺めた。つり上がった切れ長の目は、冷たく、刺

激的だ。

「そのままでもいい。リラックスしてる」

北垣はゆっくりと青年の頬に触った。若い肌で、しっとりとした手のひらに吸い付いてくる。その感触に満足していると、ぐくりと青年の喉が鳴った。

「怖いのか？」

北垣が額の髪をかきあげると、額には少し汗をかいている。青年の瞳が北垣を見上げて言う。

「お客さんのことを怖がらない人間なんていないと思います」

態度と声のトーンと目つきが全てバラバラなことを言っていた。一番北垣が気に入ったのは、その目つき。「おまえの目はいい。きれいで鋭くて、氷のように冷たくて、刺激的だ」

北垣はそう言うと、目を閉じて青年と唇を合わせた。反射的に青年の顔が引いたので、後頭部を押さえつけ、抵抗するように綴じた唇にキスをすする。下唇にしゃぶりつく。苦しそうに少し開いたところに舌をいれて口中を探る。ゆっくりと角度を

深くし、強引に舌を絡ませて、青年の細い腰と尻のラインを堪能した。

長い愛撫とキスを解放すると、青年は赤く湿った唇になっていた。つり上がった目は相変らず生意気だったが、充血して潤んでいる。

「なんか言いたげだな」北垣は鼻で少し笑った。「舌出せよ」

青年は言われた通り舌を出した。お互いの目を見詰めながら、舌を舐めあつた。絡ませてしゃぶりついた。

上がった息を整えながら、北垣は青年のベルトに手を掛けた。青年を睨むように見詰めながら、ベルトを外してズボンを下げた。そしてフローリングに膝をつくと、青年のボクサーパンツの上から股間の膨らみに顔を寄せた。布越しに少し甘噛みすると、びっくりとそれは震える。北垣はボクサーパンツの下から両手を入れて直に青年の尻を触ると、今度は膨らみに噛み付いた。

「…ッ」

青年は北垣の肩を突っ張り、腰を瞬間的に引いた。眉間に皺が寄って怒りの混じった目を北垣は受け止める。本当に怒っている青年の視線を見上げて、北垣は鼻で笑いながらボクサーパンツを下げた。青年の膨らみは先程の痛みで少し縮こまっていたが、それを手で握って刷り上げ、ゆっくり口に含んで北垣は味わう。ほのかに感じる塩分に酔い、根元から舐めあげると、青年の竿が筋張ってきた。北垣が見上げると、歪んだ口元が見えた。

北垣はそんな嘲笑する視線に満足しながら頬張り続けた。目の前の大きく膨らんでいく肉棒が己の涎と先走りの液でぬらぬらと濡れて固くなるのを見ていると途端にそれが欲しくなる。口いっぱいになくなったそれを啜えながら北垣は提案してみる。

「なああ、五万やるから、くれないか」

返事は無言。北垣は夢中でしゃぶり続ける。先端から少しずつ垂れる粘りのある青臭い液をすする。

「それ、返事いるんですか」と震えの混じった声が北垣の耳に届く。舐めながら上を見ると、つり上がった目には少し余裕のなくなった感情が映る。

「縛り付けて、殴りつけて、勝手に突っ込めば」

北垣は涎に濡れた口を肉棒から離して、青年を見上げた。どうやら勘違いをしているらしかったが、北垣自身に余裕はなかった。口から出たのはたった一言。

「俺を犯せって言ってるんだ」

その言葉を受けて青年の目は丸くなった。しかしそれは一瞬のことで、すぐに細められる。

「へえ？」

北垣の肩に添えられていた青年の指に力が入り、後ろへ押される。北垣はその勢いに逆わらず、背中を強かに床に打ちつける。痛みが背中から走りぬけたが、それすらも気持ちがいい。上から見下ろされる青年の目が自分を嘲り、蔑んでいる。そしてふいに青年の足が北垣の股間を踏みつけた。

声にならない声が北垣の喉奥から漏れたが、青

年は楽しそうな顔のまま足をどけようとしな
い。その嘲笑を浴びながら北垣は息を荒げた。

「ずいぶん余裕がないんだね。ほら自分で脱いで」

北垣は青年の言うとおりにした。寝転がったまま尻を上げてスーツのズボンと下着を脱ぐ。硬くなつた一物が震えながら上を向いている。

青年は鼻で笑いながら北垣を見下ろし、その顔に唾を吐きかけた。冷たい飛沫が北垣の頬を濡らした。

「ハッ、いいザマ。犯してあげるから、自分で股を広げて俺に見せてよ」

北垣は興奮した息を隠さず、膝を立てて太ももを持ち上げた。自分の肛門を相手に晒す。刺激が欲しくて蕾は震える。それは色づき、触らなくても少し開いて青年を誘う。

男の圧倒的な質量のものもたらす快感。それを北垣は思い出し、恋焦がれる。

「早く入れろ」

擦れた声で懇願すると、青年は嘲笑しながら中

腰になると、北垣の足首を持った。そして北垣の蕾に一物をあてがったが、意外なことに青年は北垣の様子を伺うような素振りを見せた。

「心配するな、早く来い」

北垣は命令した。そして青年の額に掛かった長めの前髪がゆらりと揺れたかと思うと、蕾の中に長く太いものが一気に押し入ってきた。

北垣は嬌声を発した。久しぶりの圧迫感と重圧感。

「あああ、いい。いいぞ、動いてくれ」

青年は北垣の足を肩に担いで、眉間に皺を寄せていた。

「動け」

早く奥の刺激が欲しかった北垣は、自分を見下ろす青年を叱咤した。蕾をわざと締め上げる。

「くっ」と苦しそうに青年は呻き、目は睨みつけるように見開いていた。唇を噛んで圧迫に耐える様を見ながら、北垣は「おい、さっさといきやがったら承知しねえぞ」と脅した。

ゆつくりと慎重に青年の腰が引き、急激に奥に打ち付けられる。

「あああつ」

自慰では絶対に味わえない快感。眩暈がした。

北垣は大きく引いては急に突く青年の緩慢な動きに興奮した。全体的外れな場所を突いてくるが、それがまた焦らされているようでいい。

「いいぞ、いい。そこをもつとつ」

北垣は目の前の青年に言う。青年は目を細めて呼吸を荒げながらも北垣の言うとおりに動いた。しかしそれは、段々北垣の意思を離れていく。リズムカルに腰を揺らし、角度を変えられる。

「あツ、アツ」

いつしか形勢は逆転した。青年は少し余裕のある顔で腰を打ち付けて、純粹に行為を楽しみ始めたようだった。北垣の方も指示する余裕がなくなり、いつしか目を閉じ、青年のリズムに翻弄された。

「ア、あ、いいッ」

満足しながら自らも腰を振る。深く、もっと深く

迎え入れる。青年もそれに倣って肩に足を担ぐ。二人の身体がより密着する。北垣は、想像より近くに寄った青年の顔に内心動揺した。

「調子に乗るなよ、小僧」

北垣が上がっている息を誤魔化しながら言うと、青年は目を丸くした後、にやりと笑った。

冷たく光った瞳に見惚れている時に、ふいに下半身に触れられた。先走りですべて滑っている亀頭を包む大きな手は最後の刺激には十分で。

「てめえ、ふざ、けん・・・な」

北垣は声を震わせて青年を睨みつけた。せり上がる快感に耐えたが、それは無駄な抵抗だと分っていた。長い長い射精の間、北垣は青年から目を外さなかった。震えた声が知らず知らずのうちに唇の隙間から漏れ、何度も痙攣した。

「こっちも、も、イきそうだ」

呻くように青年が言い、痙攣して締め付ける刺激に耐えていた。北垣の射精が終わって脱力したところ、いきりたつた肉棒が身体から引き抜かれた。

北垣が急な喪失感に戸惑っていると、次の瞬間、顔に生暖かい飛沫が掛けられた。

独特の異臭が北垣の鼻を刺激する。一瞬彼は何が起ったのか分からなかったが、青年の満足そうな顔と嘲笑を見るや否や、状況を理解した。

自分に跨っている青年を足蹴にし、後ろに吹っ飛ばした。鳩尾に蹴りが入って、青年は壁際でうずくまったまましばらく咳き込んだ。

「ずいぶん、元気だ、こと」

苦しそうに顔を歪めながら、青年は北垣に向ってそう嘲笑した。

「調子に乗るな、と言ったはずだ」

北垣は上半身を起こし、顔の汚れをシャツで拭くと青年を睨み付けた。着たままのワイシャツは汗で濡れて背中に張り付き、気持ちが悪かった。抜けた腰を叱咤して立ち上がると、ふらふらとした足取りで脱いだズボンを手に取る。

「さっさと出て行け」

財布から出した五枚の万券を青年に撒き散らし

た。花吹雪のように、俯いた青年に降り注ぐ。

「ドーモ」と青年は嘲笑を浮かべたまま北垣を見上げてている。そんな視線を無視して北垣は浴室に向った。早く汗を流したかった。

「アンタ、本当にヤクザだったんだ」

少し低い声が北垣の背中に掛けられて、彼は青年を振り返った。床に座ったままの青年の視線は己の肩越しを見つめていた。

刺青は上半身と二の腕にある。汗で透けているのか、と北垣は気づいた。

「早く消えろ」

北垣はそう言い放つと、青年を無視して浴室のドアを閉めた。

熱いシャワーを浴びて浴室を出ると、青年の姿はどこにもなかった。バスローブを羽織って煙草を啣えながら玄関に向う。置きっ放しのピザの箱を手に取り、リビングのソファアに座った。

煙草を灰皿に一旦置いて蓋を開けると、丸いはずのピザが一つ掛けていた。犯人は一人しかいない。

「あの野郎」と北垣は苦笑いすると、一切れ口に放り込んだ。トマトベースのそれは程よい酸味で、想像以上に美味しく、彼は満足した。

なにげなく青年が渡したレシートを見詰めると、製造担当者と配達担当者の名前が記されていた。今日の青年の名前が聖澤ということが分かったが、北垣はピザを咀嚼しながらレシートを丸めてゴミ箱に捨てた。

秋も深まり、落葉が路肩に積もっていた。寒さも本格的になり、そろそろ北国では雪の知らせも届こうかというある日のこと。スモークガラスのベンツが某高校の前に停まっていると噂になった。

下校している学生達が、足早に帰っていく中、一人の青年だけが立ち止まる。彼の隣にいた友人がどうしたのかと青年を即した。

「よう」とスキンヘッドの男がベンツに背中を預けて青年に声を掛けた。

「何しに来たんだ」

侮蔑に似た表情で青年は言う。北垣はそんな彼を新鮮な思いで見つめた。詰襟の学生服の上に乗っている顔は、確かにあの時の店員だった。

「まさか十代のガキだとは思わなかったよ」

吸いかけた煙草を地面に落として踏みつけると、

北垣は笑った。「お前頭良かったんだなア」

この学校は有名な進学校だった。聖澤と一緒にいる学生は、いかにも優等生然としていて、彼と北垣との関係を不気味そうに眺めている。

「俺、これから塾なんで失礼します」

聖澤は北垣を無視して友人を即すと、ベンツの横を通り過ぎようとした。

「待てよ」

北垣が笑いを含んだ声で言い、二人の前に長い片足を伸ばした。

「おい、そこのお友達」

北垣は聖澤ではなく、彼の友人に声を掛けた。

「俺は、こいつに用があつてわざわざこんなところで待ってたんだ。お前さんは事を荒立てずにさっさと

どっかに行つてくれねえかな」

そんな北垣の牽制に、学友である彼は震える身体のまま、北垣に向かい合つた。精一杯の睨みを利かせて口を開く。

「あなたこそ、聖澤くんは何の用ですか。

ぼ、ぼくは暴力に屈したりしません。もし、どうにかする気なら、け、警察に……」

言いかけた途端、北垣の平手が彼の頬を叩いた。呆然と頬に手を当て、よろける学生。

「さっさと消えろと言つてるんだ。これ以上騒ぎになると、進学に響くぜ。将来のことを考えろ」

青年は聖澤に視線を向ける。意見を求めるといふより助けを求めるような視線に、彼は内心呆れ、顎でさっさと逃げるように伝えた。

そんな仕草を北垣は笑つた。

へっぴり腰で逃げ出す学生を見送りながら、「てめえも友人は選んだ方がいいんじゃないやねえか」と言つてやる。

「あれが普通だ」

ため息と一緒に聖澤は呟いた。無駄だと分かっていても彼はもう一度主張してみた。

「これから塾があるんですが」

「乗れ」と北垣は言い放ち、反対側のドアから車に乗り込んでしまった。聖澤は、相変わらずこちらの都合を考えない北垣に腹を立てながら、しぶしぶシートに腰を下ろした。運転席と後部座席を仕切っている黒い板を北垣が叩き、ベンツは動き出す。窓から見る景色は、スモークガラス越しで、いつもとは違って見えた。

「塾なんか行ってるのか」

世間話なのか、北垣が聖澤に聞く。

「アンタに関係ない」

「バイトはやめたのか？」

「アンタに関係ない」

「なんでバイトなんてやってた？」

「だから、アンタには」と聖澤が窓の外を向きながら答え続けていると、下半身に触れられる感触があった。黙っていると、構わずジツパーが下げられ、一

物を取り出される。

このまま無視してやろうかと聖澤は思ったが、視線を北垣の方に戻した。彼はさっそく取り出した一物を口に含んでいた。

「アンタにはそれしかねーのか」

身体を斜めにして窮屈そうにしながらも、聖澤のそれをしゃぶる北垣の後頭部を眺めながら、彼はため息をついた。気を紛らわそうと再び窓の外に目を向けたが、自然と神経がそこに集中してしまふ。舐めあげる感触、甘噛みする感触、しゃぶる時の唾液の混じった音。

高ぶつてきて、思わず北垣の肩を掴むと、察して彼は口を離す。そして上がった息を誤魔化すように、ゆっくりシャツを脱ぎだした。

「車だぜ、こー」

完全にその気になっている北垣を嘲笑したが、彼は臆することなく全裸になる。腕にある蛇の刺青が生々しく。

北垣は聖澤に向かい合い、跨った。

まさかという聖澤の戸惑いをよそに、北垣は腰を下ろしていく。慣らしてきたのか、ぬめりのある感触とともに聖澤の一点が肉襞に包まれた。

「く、アっ」と眉間に皺を寄せながら北垣の口から吐息が漏れる。自分で腰を揺らし、上下に動く。

聖澤は目の前で勝手に興奮して動いている男を侮蔑の表情で眺めていた。最初会った時も勝手なヤクザだと思ったが、今回はそれ以上だ。先程から目を閉じてこちらを見てない。ただ欲望のままに動く自慰行為が、聖澤にとって面白くなかった。

腰に手を当てて北垣の動きをさえぎるように上に持ち上げると、自らの腰を突き上げた。

「ああああッ」

睨むような目が聖澤に向けられる。ようやく視線が合つて満足する。目を合わせたまま、ゆるゆると腰を揺らす。北垣は快感に翻弄されたように焦点の合わない目を宙にさ迷わせる。

また勝手に。

聖澤は舌打をして、北垣と唇を合わせると、目

が見開かれて再び焦点があつた。

「アンタ、何の為に俺を呼んだの」

下唇をそつと舐めて北垣の神経をこちらに向かせる。北垣は戸惑った顔つきで聖澤を見つめた。

「ほら気持ちいいだろう？俺をもつと感じたら？」

腰を打ち付けて、北垣も自らそのリズムに合わせて動く。呼吸が合ってきて、聖澤の中にも快感が生まれてくる。段々と北垣は背中を仰け反らせて、胸の突起を聖澤に晒してきた。

「おねだりが巧いね」

硬く立った乳首を口に含むと、下の蕾がきゅつと締まった。腰が小刻みに揺れ、仰け反らせた顔からは遠慮のない声が漏れる。

「ほら、こっち向いて」

仰け反った背中を支えて北垣をこちらに向かせ、唇にむしゃぶりついた。互いの舌を絡ませて、腰の動きを激しくする。目を合わせながら舌を絡ませていると、北垣の目つきが先程とは違うことに気づく。

「気持ちいい？」

嘲笑しながら聖澤が聞き、北垣が素直に「ああ」と答える。

「俺としたかった？」

「ああ」

「だったら勝手にいかないでよ」

「ああ・・・アツ」

北垣が返事しようとした時に、聖澤は奥へと突き上げた。

「ため、調子に、」と北垣がかすれた声で言いかけた時、聖澤は言った。

「俺はアンタのこと嫌いじゃないよ」

北垣の顔はみるみる赤くなった。何か二の句を告げようとした時に、再び聖澤が口を塞いだ。激しいキスの合間にも腰は動かされ、翻弄される。酸欠になるほどの快感で眩暈に襲われている時に、無粋な声が後ろから掛かった。

「ニイさん、そろそろ着きますが」

運転席との仕切りが半分くらい開いて、運転手

が低い声でそう尋ねてくる。北垣はぼんやりした頭のまま、荒い呼吸で「あと三十分走らせる」と告げた。目の前の聖澤はそんな痴態を嘲笑しながら腰を揺らして運転手に告げる。

「大丈夫、この人ここ弱いからすぐに終わるよ」

聖澤はそう言うが早く、北垣の竿に触れる。ぬるりとした感触を竿全体に伸ばして擦りあげる。

「て、てめえ、また・・・ああアッ」

北垣は運転手が聞いている目の前で絶頂に達した。学生服に白い飛沫が飛び、急激に収縮した蕾のせいで、聖澤も射精した。北垣は身体の中でそれを受け止め、互いの痙攣がおさまるまで自然と抱き合っていた。呼吸が整ってきたところで、また無粋な声がかかる。

「三イさん。到着です」

運転手は冷静な声で最後の時を告げると、間の仕切りを再び閉めた。二人は互いに視線を合わせると、どちらともなく唇を合わせた。そして北垣は何事もなかったかのように聖澤から離れて身支度

を整えた。

車が停まり、運転手が車を降りた音がした。しばらくすると、スモークガラスの向こうからノックされる。準備はいいか、ということらしい。北垣は最後にネクタイを閉めると、開け放たれたドアから車を出た。

聖澤は眩しい外に、大きな日本家屋の玄関を見た。黒服のいかめしい男達が列をつくって北垣を迎えている。周りには似たような外車がつらなり、人相の悪い男達が次々と降りていった。

北垣はドアを閉めた後、運転手に何か告げ、屋敷の入口に向って歩き出した。聖澤はそんな後姿を不思議そうに眺め、学生服のポケットから煙草を取り出した。

「いけません」

火をつける時に、車に戻ってきた運転手が聖澤をとめた。

「ヤクザが何いってんの」

嘲笑しながら煙草に火を点けると、運転手は席

から身を乗り出して煙草を奪い取った。

「ガキが粹がるな」

運転手の視線はヤクザのそれで、十分に威圧感があった。逆らわない方がいいと本能的に察知する。「分かったよ」聖澤は降参とばかりに両手を上げると、男は最後に一睨みして席についた。

「ニイさんがご自宅まで送ってやるようにと。ご住所はどちらですか？」

再び丁寧語に戻り聖澤は苦笑した。運転手の顔は北垣のように強面ではない。むしろ整ったハンサムな作りだが、それゆえにドスの効いた声にはギャップがあつて恐ろしさを倍増させた。

「ねえ、アンタ本当は運転手じゃないんじゃないの？」
運転手より北垣の身分の方が上なのは明白だったので、聖澤の口調は軽い。自分はこの男に攻撃されない自信があつた。けれど。

「調子に乗るなよ、ガキが」

不愉快そうな声が返つて来て聖澤は閉口した。

「ニイさんは君の身体に用があるだけで、君が特別

というわけではない。勘違いしないほうがいい」

聖澤はその丁寧な口調の辛辣な言葉を聞いて、ぐったりとシートに身を委ねた。そして独り言のようにはやく。
「分かってるさ」

視線を窓の外に向けて、運転手に自宅近くの公園までのルートを告げる。制服は精液で汚れ、白くなっていた。北垣から受け取ったウエットティッシュで拭いても痕が消えない。

過ぎ去っていく景色を眺めながら、気だるく心地よい気分^に身を任せる。

今日は以前のセックスとは少し感じが違っていた。いや、強引に自分が変えてしまった。あのまま自慰を手伝って^いれば、ただの性処理として、またヤクザにやり逃げ^されたと勘違い^{でき}たのに。

最後にキスなどしなければよかった。

車は市街地を抜けて、聖澤の自宅近くに到着した。近所の目を気にしながら彼は車を降り、胸に少しの後悔を引きずりながら、運転手に礼を言う。

そこで封筒が渡された。

「これが今回の分です」

聖澤は冷や水を浴びせられたかのように、震えた。思わず「いらぬ」と言っていた。

「そういうわけには」

運転手が強引に手に押し込もうとした時、妙に腹が立った。力任せに封筒を払いのけると、何枚かの札が飛び出し、車内に散った。

運転手は静かに怒りのこもった顔を聖澤に向けたが、彼は凜とした顔で首を振る。そして学生靴から紙を出すと、携帯番号を書き記して運転手に渡した。

「これは？」

「今度来るとき学校はやめて欲しいと伝えてよ。」

電話くれたらその場所に行くから」

運転手は眉間に皺を寄せると、揶揄するように口元を歪めた。

「君はこういうことが二度三度あると思っているのか？」

ただの遊びに決まっているとその声は暗に言っていたが、聖澤は再び首を振った。

「それはアンタが決めることじゃない」

運転手はその言葉を受けて絶句した。聖澤の顔つきは絶対的な自信に満ち、口元には笑みが浮かんでいた。氷のように射抜く視線の強さに運転手は圧倒された。

「こいつはまた」と運転手は呻いた。「夕子の悪いガキだ」

「ドローモ」と聖澤は自嘲するように笑い、運転手に再度送ってくれた札を言った。そうして彼は一度も車を振り返ることなく、堂々とした足取りで、公園の向こうの路地へ姿を消したのだった。

了